

三つやの巻

正道の巻

信仰の要領	一
威神光明	四
正道	六
意志靈化	二二
業の勢力	二六
人間中の十界	二七
地獄の三階	一九
我窟の魔	二三
十界	元
道徳四階	三三
グリーン道徳説	三五

信仰の要領

宗教は、先づ安心を定むるのが第一であります。

安心とは、信仰の決定であり、安心を定むるに三つの條件があります。

第一に、絶對的に信賴する神を信認すること。

第二に、信仰の目的、即ち此の世及び未來永遠に安心出來得る處。

第三に、いかなる行業にて其の目的を達すべきか。

初めの信賴する神とは、宇宙には絶對的に尊といふ二つとない唯一の偉大なる力を以て、一切の衆生を攝取して救ひ玉ふ尊きかたを、如何なる聖名を以て稱し奉つるのであらうとなれば、釋迦如來は私共に教へて唯一の尊とき神を阿彌陀如來と云ふ名を以て其の尊とき御方を教へて下された。

經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして、諸佛の光明及ぶこと能はざる處なり

と、是である。

絶對的に尊き如來は一體にましませども實に無量の功德備はり給ふが故に、無量光等の十二の名を以て御徳を表はし給ふ。

此の尊き如來は全く私共の眞の大御親にまします故に、永しへに慈愍と智慧の御心の光を以て私どもを照護し給ふのである。晝夜の隔てなく其の大光明の中に護られつゝあると云ふことを信じて疑ひなく、眞實に心の本尊様と成つて居る様になれば先づ第一の信賴する神が定まつたのである。

次に信仰の目的とは今現在のかたちの上の身も此世界の事も永遠の頼みと成るものではない。肉眼で視ゆる世界は何處までも嘗てに成るものでない。依つて大おやさまの御聖旨の在ます方を極樂淨土といふ。其の極樂淨土は絶對的に生死のない處である。其の常住不滅の淨土を以て歸着する處と定むるのである。さればとて死して後ちと云ふことはない。眞に大ミオヤの如來が能く信じらるれば、眼を閉ぢて深く能く感じて見れば此處が矢張り如來の大光明の中であり、大光明の中に正しく安住する精神と成れば、たとへ身體は、假りの身であらうとも精神は極樂の光明界に栖みあそぶ想となり、眞に信仰出來れば、肉眼では娑婆に居るもの、心には淨土に安住する理想となる。而して彌よ／＼命終りぬれば今迄理想に見て居つた、淨土が今度は現實になつて來ると信するのである。若し此の信仰が出來れば、身體は死しても心靈は永遠に不滅と成るのである。

第三に其の目的、即ち精神極樂に安住する様に、如何にしたならば出來ると云ふに第一の信する如來様を寢ても覺ても、心に懸けて信念を運ぶ時は、遂ひに何時でも如來の光明の中に在る想と成る。常に念佛を稱ふる旨趣も、常に如來を心に念じて、心にはなれぬ様にする爲である。

或は如來の十二光佛の禮拜をなし、または如來の御功德を讃嘆する、即ち讃歌をうたふのも、矢張り大ミオヤの如來を心にわすれぬようにする爲である。然して全く信

心開發する時に身は此處に在りても、心は淨土即大ミオヤの大光明中に栖あそぶの想と成る。

右の三つがたしかに定まりて、疑がはざるに至つたのが安心決定した信仰と申すなり。

威神光明

教祖釋尊の教によれば、阿彌陀如來の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明の能く及ばざる所なり。また曰く光明普く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て給はず。今日く如來は靈界の太陽なり、例へば太陽の光熱化の三能を以て一切生物を化育する如くに、如來は智慧と慈悲と威神との光を以て衆生の心靈を靈化し給ふ。經に曰く若し衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ずと。衆生佛性の卵は如來の慈光に孵せられ、生死の凡夫は轉じて永生の佛子と爲り、闇黒の我は光明の我と生れ更る。されば念佛する人は人中の白蓮華なり。觀音勢至も勝友と爲り常に佛と成るべき佛の子なりと。

○ 教祖釋尊此世に出給ひて一ら彌陀の眞理を教へ給ふ。曰く無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はず。又無量壽如來は萬徳を總表するの嘉號なり。斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ず。實に彌陀は心靈界の太陽なり。例へば太陽の光熱化を以て生物を化育する如く、如來の智慧と慈悲と威神との光明は念佛衆生の心を靈化し給ふ。若し衆生が如來の聖意に合はんと欲つれば、至心に如來を信じ如來を愛し靈國に生せんと欲すべし。然る時は衆生佛性の卵は如來の慈光に孵せられ生死の凡夫は永生の佛子と更り、闇黒より光明の生活と變る。されば經に若し念佛する者は人中の白蓮華、觀音勢至は其勝友と爲り、常に成佛すべし諸佛の家に生れたりと讚たまへり。

古歌に

心から心の月のすみかねて幾世の間に迷ひきぬらん。
出づるとも入るとも月のおもはねば心にかゝる山の端もなし。
西へ行く心一つのたがはずは骨と皮とに身はならばなれ。

正道

信心已に開展して如來の中の光明生活、即ち如來の神的衝動より實行々動するを正道と爲す。即ち如來の司導する行爲なり。
また佛知見開示して佛の正道に行爲する故に正道とも云ふ。正道は一時に非ずして常恒不斷に進歩すべきの過程なるが故に、絶對的如來に依屬せる精神にも、自己の習氣は肉のあらん限りは、忽にする時は退歩の憂なきこと能はず。彌陀の恩龍の中に在つてもまた自己の罪惡を生ず。念々に恩龍を感じて念々に罪惡を轉ずべし。罪惡の性は菩提なる故に、如來の恩龍によれば忽ち變轉して如來の靈能と顯はる。如來の無限の光明の中に常恒不斷に念々に一步／＼新らしき地歩を收めざるべからず。歩々不斷の靈光によりて新しき地を占め、愈々に起り來る煩惱をして悉く如來の増上緣力の下に靈化せざるべからず。是の如きの信仰を鞏固にして金剛の意をなす。
此聖道即ち道德自修の目的となす處は改善にあり。改善とは自己を剋して如來の聖意に服せしむるにあり。この改善は修練習慣によりて全く性格を變更するにあり。消極的には利己の惡を脱却し積極的には如來の理性即ち至高善を得んと練修す。八正道即ち正見乃至正定は小乗のとは名目に於ては同じきも、其内容に於ては全く異なるなり。八正悉く如來の中の神的行爲にして、如來の光明聖意を自己に實現し、如來の目的に協力して、聖道に進趣活動する行動なり。

正見

佛知見開示してこの正知見が司導となりて行動す。已に正知見開示する時は従前の盲目的衝動によらず、自己は如來の中の個人たるを意識し、如來の終局的に協力し神聖正義の光が自己主觀の光となりて、此光の中に實行すべき命令となり、即ち絶對理性の彌陀の内容を自己の主目的とし、道德的自律を完成して、客觀的目的を主觀的規律となす。正見は云はゞ通じては理解性にして眞非眞を認識する職分にして又善惡の行爲を決定すべき意志なり。正見は意思を決定して正善に指導す。正知見なき情操と意思とは正善に決定すること能はず。

正 思

如來に依る思惟を正思とし、爾らざるものを不正また邪思惟となす。人は思惟によりて善惡邪正の決定すべき目的を思惟し籌慮す。已に恩寵獲得したる人も猶天然の性存するを似て放恣にするときは墮落の憂なき結ばず。已に獲得したる恩寵即ち聖意を實現せんとし思惟し、法藏比丘の如く思惟し撰擇し學習して、常に自己の兪惡を捨て如來の眞善を選択し、常に新にしてまた新なれ。

一たび恩寵獲得してよりは、正思惟によりて正邪善惡を見ることが明かなるが故に自己をすて如來の正善を選択するに甚だ便利なり。

理性的意思は理想によりて規定せられたる人の意思の最高の發展形式なり。理性的意思は天然生理に規定せらるゝ下等の意思衝動欲望に對して、正義の理性によつて批判撰擇の務に任ず。理性的意思即ち良心が天然意思を正思惟によりて修練し訓練す。

意思の自由は佛性にして、この理性の自由即ち正思惟によりて如來の目的に協力せざるべからず。人間の自由は聖靈をして動物的欲望を支配せしむるにあり。人間の意思自由は感覺的欲望及び性癖を理性と良心によりて統攝し、目的及び規則に従つて其生活の規定する能力なり。

正 業

積極には眞實を守り、権理を保ち、家庭社會の秩序を紊さざる如き、消極には不殺

不盜、不邪姪等の如き、如來恩寵に衝動さるゝ作業活動なり。自己の惡素質と從來の惡習慣とは聖意に適せざるものとして矯正し、如來の道德的性情を養ひ、聖意の實現に意を注ぎ、靈化の恩寵をうけて道德實行するにあり。情操は一變して退轉せざるも之を實行々動に實現するに非ざれば未だ正業とするに足らず。良心よく主觀的に道德秩序を發見し、自律的に一切の身業悉く如來の聖意實現的に行為す。恩寵を獲得して意思の靈化即ち菩提心顯動せざるべからず。其動作にして客觀的には行為者及び其周圍の人に安寧を増進する圓滿なる生活形式を成就する傾向を有し、之と同時に主觀的に義務を盡せりとの意識を有する時は、之を道德的に善と稱す。善人は必ず其業務を怠らず、各自の職分を全うす。自ら恩寵中なる自己の義務を盡せりとする行為は正業にして、自ら斯々の行為は聖意に乖くものとする行為は邪業なり。法華に佛法を體得する人は一切の治生産業も悉く實相と相應すと。

正 精 進

人は已に全心全幅を如來に投じて恩寵を離れたる自己の情操なきを感じ、如來に安立して性格も一轉して靈化せるも、天然の自己あらん限りは煩惱及び誘惑物との健闘を廢止すべきに非ず。

人如來の中の精神生活をなし、即ち斯土の諸々の衆生と共に平等の同じ恩寵に靈化して、精神的に斯土に安寧界を建設し、神聖理想を實現せんが爲には、直前前進して個人の利害生命をも犠牲に供せざる可からず。既に靈化せし意志は自身の利害生命を犠牲に供することに躊躇せざるに至らん。

正 命

正善なる生活を正命とす。人の理性に適合する生活は人間の絶對目的にして、理性に適合する生活を營むは即

其安寧を求むる所以なり。充分の勢力と健康を保ち、正善なる身體及び精神の諸能力を圓滿に發展せしめ、一切の理性的倫理的な生活活動を増進し自己と自己に近き人々との關係を益々親密ならしめ、如來の恩寵によりて精神生活の内容を深くして、神的安全を得て圓滿に生活す。至善は如來の恩寵にして、如來の理寵に充ちたる内容即ち性格と行爲にて到達す。正義の觀念によりて盡すべき義務をまとうし、自己を捨て、聖種性性格とし、正しき意志決定を涵養す。

慈悲歡喜正義安忍剛毅貞操謙遜眞實等は光明生活の正當なる生命なり。

意志の靈化

人の精神活動の意志なるものは、不識と意識とを論せず、常恒不斷に相續して一に
 ならず、異に非ず。人の意志は常住不動の如くに觀すれども、實は然らず。形式は常
 に一なる如くなるも内容は不斷に新陳代謝して、常に非ず。然れども其の展轉變易實
 に微細にして、常に一定なるが如くに觀するは、恰も水の涓々たる、常恒一體の如く
 にして、而も易るが如し。然れば經に人一日一夜の中に八億四千の念ありと。

常恒不斷の活動せる心意を自由に統御して、一定せる目的に向ひて進行せしめて、
 専横放肆ならしめず、不斷の活動を至善に向はしむるものは如來の不斷光なり。

一日一夜八億の活動を盲目的に動くものは即ち三惡四趣に趣向するの心意なり。

不斷光の性質を分析すれば如來の神聖正義恩寵との三要素より成れる靈光にして、
 人の意志を靈化して聖靈無上菩提心即ち靈的道徳心として靈的活動なさしむるの力な
 り。

意志の信仰は如來の聖光によりて靈化する事、之を世間に云はゞ意志を鍛鍊して
 自由意志を以て高等なる道徳心を修養するの謂に外ならず。

光明なき意志の盲動に二種あり。善と惡となり。眞理の光明なき意志は、たとひ
 他に善を興へ不道徳罪惡とまでに至らざるも、宗教より云はゞ、光明なき無明の心意

が、神の目的を目的とせざる無明より盲動する心意が、偶然に善に相應するが故に、
 惡と云はす善と稱するも、眞の至善に非ず。此の無明の動機より出づる善惡に各三等
 に分ち之を三善道三惡道とす。

人の意志性格が善惡の習慣から由つて或は惡に傾向せると、善に向けると、その善
 惡の意志の發達程度に於て各三等あり。

其の性格意志が邪惡にして、其の動機より念々邪惡の心を衝動し、肉慾我慾の最
 も重きより日々八億の念を焰々として胸中より吐出し、之を語と行爲とに惡業を積累
 するに到るは、地獄的意志と爲す。

次に肉慾我慾の我意的動機より、已に病的となりて盲動し、八億念々に餓鬼の業を
 造作するは餓鬼的意志なり。

盲目的意志に因果の理を信せず、肉體あるを知りて精神あるを信せず。唯肉の幸福
 をのみ希望し、心靈の幸福を求めず、今日の快樂を追求して明日の活計を圖らず、愚
 痴盲目生活に安んずるは即ち畜生の意志性格なり。

斯く三類の意志動機より日々八億の念々意志活動は三惡道を造る。

人の意志性格道徳の動機に數多の階級あり。ゾント氏が道徳の動機に四の階級を立
 つが如し。

道徳的動機の最下等なるは、傲慢を本とし、勝他的の動機より、名聞の爲に善を作
 すも、其の意志より觀るときは未だ正善なりと云ふべからず。

名聞の善、勝他の意志より起すが故に、偽善道徳なり、かゝる動機より八億の念々
 三業を動作するものは修羅的意志とす。

人的動機。世俗的情操、所謂普通の人情義理と云ふ動機から、世間的道徳、浮世の
 務として、又其の風俗習慣に規定せられたる良心の動機より、惡を除けて道徳的行爲
 をなすは人間的なり。其より八億念々人間を造り出す意志なり。

天道的動機。世間の人情義理の制裁によりて道徳をなすに非ず、自然天真の爛漫な

良心より、又天道を怖れ天は萬物を恵むが如く、自然の理に本づきて道徳の動機として、念々善の三業を動作するは即ち天道的動機とす。

斯の三類は、進んで靈の光明を得るに非れば、其の意志靈的の光明なるに非るも、世間的自然的の道徳意志なり。故に三善道の意志的の性格とす。

業の勢力

其人々の一生の業作の習慣性が鞏固に決定したるを業識と名づるのである。さて個人の靈魂不死のことにつきては、カントが天國は理論には有とも無とも證明できぬけれども、實行の結果はなければならぬと言ひしが如くに、地獄や天堂は之を理論に證すること能はざるも、人の生涯の善惡の業識と其の業の勢力とは常に形骸かぎりとは云はれない。銃丸の火藥の勢力は唯銃中にとゞまらざるが如く、善惡の業力と習慣の性格とより見れば六道瞭然である。十界は其意志性格に顯然たり。

人間中の十界

宇宙全體が本一大心體にて其中の一切を總て十法界と概括して盡す。其一分たる人間界にも凡ての人類中に上聖賢有徳の君子より下は逆惡無道の輩に至る迄の性格、實に無量であるけれども之を概括して十界に分類する事が得る。今暫らく人の十界を擧げて明さば、

人間本動物の進化したる物なれば、矢張動物の本能も有て居る。尙進んで意識的に悪性が發達し、動物性が種々の方面に發達して十界に分類せらるゝに至る。人間も動物の一種である事は、經に、諸天人民蠕動の類衆惡を爲さんと欲ふは皆々然である。強き者は弱きを伏し轉相剋賊し殘害殺戮して迭ひに相呑噓す。惡逆無道なれば後に殃罰を受けて自然に趣向す。神明記識して犯者を赦さず。故に貧窮、下賤、乞匄、孤獨

聾盲、暗啞、愚痴、弊惡なるものあり、狂狂不具の屬もある。又尊貴豪富高才明達なるものもある。皆宿世に慈孝ありて善を修め徳を積みたるからこゝに至る。世に常の道の王法の牢獄有れども、肯て畏れ慎まず、惡を爲して罪に入て其殃罰を受け、解脫を求むれども免れ出で得難し。世間に此目前に見る事あり、壽終て後、世に尤も深く尤も劇し。其幽冥に入り生を轉め身を受く。譬へば王法の痛苦と極刑の如しと。

個人の十界

大宇宙の一分身たる各個人は如何に小なる生物にも大宇宙大法身に具有する處の理法は全く具有す。極小の生物は十界の性能を有つて居るけれども、其は伏能して藏めり。然るに人類に至りて初めて顯動態と成りて來た故に、個人に十界の性能が具備して居る。先に述べたる如く一念の殺意は是地獄の心、乃至一念歸命の心は是佛心、是れ即ち伏能したる心が縁に隨つて現行するに外でない。各個人の頭腦に十界の性を具するに就いては、骨相家の主張する如くに、人の頭腦の上は仁慈性尊崇性より、下は男女性破壊性等に至る迄、種々の性が頭腦中に其性の部が定つて有るとは肯定し難きことなれども、人の頭腦中に四十二性乃至五六十にも分けることを得らるゝ性を有つて居ることは疑を容れぬ。

地獄の三階 家庭と國家と大宇宙

世に宇宙の大法と人間との關係に就いては未だ何の考慮をも有たぬ處の俗輩の云はるゝには、何の宗教でも惡人は地獄に墮ちて未來の苦を受くことを説けれども、予輩は憐る處の實に在らうとは信せられぬと。然れども現在に地獄が在つて此に墮入たる時は、應分の苦罰を受けることは疑を容れぬ。現に監獄中に呻吟し苦役することは目撃する處であるが、尙此外に宗教家の説く如きの地獄あることは信じ難しと云ふものがあり。予は其人に對して怎樣に説明を試みた。

貴氏は現在國家に在る地獄を信することが出來れば、尙氏の精神にして一步進むと

きは大宇宙の地獄なることも信せらるゝ様になる。今氏が爲に地獄に三階あることを話して見よう。曰く家庭と、曰く國家と、曰く大宇宙と。先づ家庭の地獄とは正しき家庭には、父母其小兒に對して善を奨勵する爲め善事をなせば褒美を與へ惡しき事は戒むる爲めには罰室と云ふ地獄にも容れざるを得ぬ。憎いが故ではない、可愛き子を善良に育てんが爲めである。漸く年五六才位の兒には國家の地獄なる監獄の恐るべきことはいまだ分らぬ。若し地方の小兒に對して云ふと惡徒を爲ると横濱の監獄に入れつて赤き衣物を着せると云ふても、小兒は横濱と云はゞ好き處なので赤べゝと云ふは還つて悦ぶのである。故に幼稚の小兒には家庭罰室の怖るべきを感ずれども、國家の地獄の痛苦と云ふことは未だ分らぬ。已に青年已上に成りてからは、惡を懲戒せんとするも家庭の地獄では効能がない。依つて國家の地獄に墜して苦罰を與へて懲されば矯正は出來ぬ。國家の地獄の上亦宇宙大法に依つて成り立つて居る自然の大地獄が理として無くてはならぬ。如何となれば國家は即ち宇宙の一部分である、一分なる國家の法としての地獄は宇宙の大法則に基いてゐるので、人が國家の地獄を知りながら其宇宙大地獄の在ることを了解できぬのは未だ其意識が幼稚で有る故である。恰も小兒が家庭の地獄あることを怖れて國家の地獄あることを識らざると同じようなものである。小兒が成人して知識が進むに隨つて國家の地獄あることを識り得らるゝ如くに、貴氏は未だ理性亦靈性が幼稚であるから、宇宙の大地獄が信せられぬのである。今に宇宙の大法が能く解せらるゝまで意識が発達したなら、大地獄の存在を信せざるを得ぬ様に成ると話した處が、成程然であるかと云はれた。現代は人爲則の法律などには随分能く解する腦を有つ人は澤山あるけれども、宇宙の大法則の解る仁が鮮いには傷しいわけである。尙地獄は人々精神中にも存在して居る。若し隠れて惡を作し罪を造り居れば、假令他人は之を知らざるも自己心中の怖畏心は事に觸れ縁に隨いて感ぜざるを得ぬ。

閻魔王も人の精神中に良心として存在す。惡を爲す時は後の良心呵責は己を誠むる

法王である。惡が病的と成りて良心滅亡したる漢に至つては、閻魔からも已に地獄の宣告を受けた族である。

閻魔王の法庭には罪人の生涯造りたる罪を照す淨願裂鏡が懸つて居る。若し此鏡に向ふ時は己が一生造りし處の惡業が明かに見ゆると。實に然り、人々自己の心を静め冥想して明かに自己の既往の罪惡を反照するときは、己が心の淨はりの鏡に歴然として現はるゝ。然るに世の人自己が淨はりの鏡を顧みず還つて之を疑ふ。愚ではないか。

我窟の魔

人の我窟に三鬼神ありて人の精神を横領す。飢渴神と貧慾神と怠惰神となり。甲は肉慾を主とし、乙は財慾を司どる。

此三神に其精神支配せらるゝ時は、此三神は人類を餓鬼道に誘導せんとの第二の惡魔は之より使はされたる魔鬼なり。人の精神に此魔鬼宿る時は微菌が其身體に附植して養分横奪せらるゝ如く、此魔鬼人の精神にあつて道德的性能を劫奪せらる。此三者に其全心奪はれんか餓鬼道に墮落せんこと免るべからず。

鬼に多種あり。

鬼道に墮する輩は假令法律の罪人を免るゝとも道德上の大惡人たることはのかるゝ道なし。

我慾餓鬼また財慾餓鬼とも云ふ。此金錢財物の強慾無道。彼らは己が我慾を充しめんが爲に、他人に害を與ふるを厭はず、排他的志他的即ち己が慾の爲には他を排斥し又己が利の爲に他人の迷惑も忘れてしまふ者。經に所謂の富者にして財産を山に積みなすとも、之を公共の爲にも慈善事業にも投する事能はず。此らは唯財を積むは我慾を充しむる器具なり。人の蓄財の觀念が自己を天地の一員として天地に盡す。天地の爲に天地の働きを充實し天地に報いんが爲に働ける酬として得たる財産、己を國家の

一員として國家の爲に正しき働きを以て財を造りて國家に酬ゆるは人道的なり、只天地の爲にも國家の爲にもあらず、只己が我慾の爲に財を蓄ふるは餓鬼なり。實業家が法律の犯罪者たらずとも道德上の罪を犯して不正の財を起し弱肉を食んで己が財囊を太らしむる如き、また勞働者の汗膏を捲上げて己が華奢の料に供する人の如きなり。

修羅。カーヂナルリセリユーは政治家、自ら大詩人と思はれたき奇癖ありしを以て大戯曲家コルネーユの聲名を嫉み、彼に對して惡評を書くべく命令せり。故に同氏に媚びる人、彼の快意を買はん爲に貴氏は大詩人、優雅の精神に富めりと語れりと。パトワールポールは胸中阿諛の念なきも且つ當代無比の義侠心雅優心に富める人と思はれたしの弱點を以て他人に翻弄せられたりと。

無明。老畫伯あり。嘆じて曰く「天よ予に過なし。既往に於て一層優れる法を講せざりし罪を宥し給へ」と多くの人は既往に成せし事を回顧して嘆せざる者はなからん。

畜生。人間中の畜生とは如何なるものか。畜生は即ち動物である。人類も本動物の進化したる生物であるから、營養とか生殖とかの如き或生理上の働きは動物共通である。假令人間と生れても高等なる精神が發達せずして、動物性計りが發達するときは選つて惡智慧發達した動物である。道德倫理もなく社交上の仁慈もなく義理も人情もなき社會の義務の感なき如きは人身獸性である。同じ人間中の動物なる浮氣の禽の如き横暴なる虎狼の如きあり。公平の道理を毫も解せず、己が思ふ一圖なる痴漢にして蟲のやうな族もある、又猿智慧の族、人を欺惑する狐の類、恩を知らぬ獅子の如き、執念の深き蛇の如き、衆人に嫌はるゝ蛇腹に比すべき人身の動物類にあらずや。

されはとして進んで地獄の猛烈なる熱火に焼かるゝ程の惡人でもなく、肉慾我慾の動物として餓鬼道と迄も惡が發達せず。進んで人間の資格を有したるにあらず。本能的の動物性の重き處の性格なるものは實に人中の畜生である。

修羅。人間界の修羅道とは、修羅とは本三善道の中に下品な性格なので、傲慢勝他

の性、本より其内心に高尚なる理想大なる希望なく、只橋慢勝他の性から衝動する行動、慈善をなすも只名譽の動機により、道德的行動あるも勝他の爲よりなす、偽善偽徳を以て名を釣り權威を追ふ、内に誠實なく外賢善を衒ふ。

經に慘賊鬪亂誠實なく、尊貴自大にして己れ道ありと謂ひて横に威勢を行じ、人を浸易して自ら擧高して人の敬難を欲み、天道を畏れず實に降伏すべきこと難しと。斯の如きは修羅道格とす。又勇のみありて知と仁に缺けたる豪傑の如きは是である。

ナポレオン、カイゼルの如き楚の項羽、平の將門、織田信長の如き己が國の爲には人道を亡すは人中修羅道王たるものならん。

人道。假令人間の身たりとも人格具らざるものは眞の人間と云ふことが出来ぬ。若し人間に生れた己上假令自恣に育つとも自らは人格を具備すると云ふことは難い。本能自然主義を唱導する類あるとも、そは人間は本能ではない。淘汰薰修せなければならぬ生物である。喩へば鑛物中にも天然の儘にて使用すべき石あり、琢磨せざれば光輝の發揮せぬものある如く、他の動物は本能に育てば充分であるが、人類に至つては高等なる鑛物と同く訓練の要ある動物である。人類は精神生活の中理性が發達して而して自己の理性が自分の肉慾などの慾を抑制して而して人道を履行するにある。

若し人間であるから天然のまゝに恣にすも自の人格具るものとすれば、教育の中に修身科の要はない。豈然らんや、薰陶宜しきを得なければ人格は具はらぬ。例へば國民教育の教科書に古來の道德上立派な人物を擧げたるは、人間にして眞の人格具つた人物を標榜したのである。支那の孔夫子の如きソクラテースの如き人道的道義の聖者である。洋の東西を云はず人道を中心としての道義は即ち人間中の人道の唱導者である。キリストの如きは天道的道德、道德の根底を天の神より割出して居る故、天道的道德と云はん。中井藤樹や伊藤仁齋貝原益軒二の宮尊徳の唱導する指導する處は即ち人道を人間の中心として道德の標準として立て、居る。

天道。人間中の天道とは公平無私仁慈博愛有徳の君子、人間中の最高等なる人格な

假令靈性を開發して神人合一靈格と云ふに至らざるも人格上最高等なる有徳君子なり。天は公平無私天の恩恵を被らざるものはないが天の恵に對し感謝の表はるものも有れば、一向天に對して禮せざるものも多し。然るに天は平等に偏頗なく愛撫し、日惠みを一切の人類に及ぼして居る。彼の天の意の如き君子あり。國家の爲め人類の爲めならば己が身を犠牲にして盡す。堯舜禹王の如く人民を子の如く愛撫し世の爲に自らを犠にして世の幸福を施す。仁徳帝の民を愛する仁主が寒夜に衣を脱ぎし如き寔に是天中の天と謂ふべし。亦賢臣名將にして己を忘れて國君及國家に盡す和氣清磨の如き又橋氏の如き、國の神と祀らるゝ人は皆是人中の天輔と云ふべし。或は電氣又蒸氣等を發明して天の機を人類に啓示したる如きは宜しく天使と見て然らん。又ナイチンゲール忍性上人の如きは人中の天使と云ふも可ならん。

漢の楊震仁義の道を守り其知恵巧、時の儒者關西の孔子と呼ぶ。東萊郡の太守となつて行かるゝ道にて、昌邑の令王密先に恩を受けたるを以て、夜中密に旅宿に見舞ひ禮を述べて黄金十斤を捧ぐ、楊震大いに驚き天知地知我知子知と云ふ。

源頼光の徒渡邊の綱、定光と羅生門に鬼神あつて、人を惱ますと云ふ何共合點ゆかす誰か實否を見届げんと云ふ。時に綱我馳せ往きて鬼神を討取らんと、ゆく道すがら謂ふ。人ならばいかなる強勇にても後は見せじ。然しまだ變化に出合す心もとなさされば引返して何事もなかりしと云はんかと思ひしが、それでは勇もなく信もなしと我が心に恥ぢ入つて一首、人ならば無といふともありぬべし、心の問はば何と答へんと。口號み羅生門に至り鬼の片腕を切る。

心に十界を具し十界を造る

或る他の説によりては、人の性は善なりと、亦惡なりと。然るに佛教に於ては、性具十界とて、人の性には迷と悟善と惡と十界の性が悉く具有して、而して働きの強

き方を造り出すと云て居る。各自の心に十界の性を具有してをる故に、縁に觸れば鬼の如き恐ろしき心も起る。是地獄の性なので、亦他人の榮を嫉み亦慳貪の心は是餓鬼の性、愚痴横着は畜生の心、橋慢は修羅の本にて、人にいかに墮落に沈みても良心の責あるは人の性である。慈善や公德心あるは天道の分と云ふ。又眞理を開けば悟りたいと思ふは是聲聞の性あるからで、人生の歸着を明めたいと云ふ如きは緣覺の端である。無佛論者でも絶對時には自ら稱名の聲を發す。是佛性あればである。人々十界の性は具さに有ておるが、中に就て何れを造り出すかは種々の因縁から其生涯の業に由て決定することになる。之を理に十界を具して事に十界を造るといふ。

地獄界。三塗の中に火塗と云ふ。八大地獄乃至數多の地獄あり。罪の輕重に依て苦を受ること同じからず。然れ共皆烈火に燒る苦あり故に火塗と云ふ。大焦熱無間等は最も劇苦の處、是十惡五逆の業による。邪見逆惡の業に由て倒さまに落て極火に燒かる。己が罪業の薪ある限りは火消ゆることなし、之を地獄と云ふ。

餓鬼界。山林塚廟に祀らるゝ鬼神もあり、又不淨處に在て飲食をえずして飢餓に苦しむ、鞭打を受く、刀劍を以て截らるゝ、如き苦あり、故に刀塗と云ふ。有財餓鬼あり食物を見乍ら口少さくして噉ふこと能はず。是昔財を積むこと山の如きも、我慾の病的に陥り益罪を累ぬるに由る。無財餓鬼は飯食を求む。我慾の病的に陥り罪を累ぬる報である。又無財餓鬼は飯食を求むれども得ず、飢渴に苦しむ。是當世に自ら活業を勉めず、而して酒に耽り色に荒み、肉欲の病的なるを因として此身を受く。

畜生界。動物相互に呑噬して血を流して苦をうく、故に血塗と云ふ。天人人道の正しきを行はず、横暴なる業から横さまの身を受く、故に傍生とも云ふ。羽毛鱗角乃至昆蟲等に至る迄三十六億の種類ありと。世間に身は人間に受乍ら横暴なる、虎狼に等しき族あり、又犬の如き破廉恥なるあり、又狐の如く人を魅する漢あり、形は人たるも其情操と行爲に於ては畜生類よりも甚しきあり、凭の如き因あれば、必ず畜生の果をうけん。此の三道上中下の三品に分ちて三惡道とす。

修羅界。此界に生るゝ物、常に鬪争を事とし勝敗定まりなく、相互に競ひ合ひ恐怖の苦休むこと無しと。世に驕慢擧高の野心家、上はナポレオン、カイゼルの類、下りては世の野心強き者、身の分を顧みず、名譽の奴隷權威の争ひに逐鹿の鬪をいどみ、彼等内に誠實なく仁心なく外賢善を装ひて自らは是とする輩、斯界は惡道には非ず、偽善偽徳下品の善である。

人間界。縱令形は人類たるも人格具備せざる者は未だ人たらず、亦身を人間に受けたる者、自ら人道に叶ふものせば教育に修身科の必要はない。佛教の五戒又儒教の五常に契ふ人は人格具はりたるものとす。世の教育及び道學等は人道を標準とし、天道また成佛的の道德とは其の歸趣同じくない。人道教育は全き人間を形成するを目的とす。

天上界。六欲天と色無色との禪定天とあり。

道德 四階

ウイルヘルム、ヴント曰く、道德程度四階。

四、名譽を思ひて自ら制す。(不道德の行爲を避くるに止まる)。

三、自己の教育習慣 現 遇及び隣人善行に制せらる。(不道德の行ひを厭忌する)。

二、良心の満足を求むるに在り。良心満足、永久幸福、然れども良心以外に大なる標準なき爲め判断を失ひ邪路に入るなり。

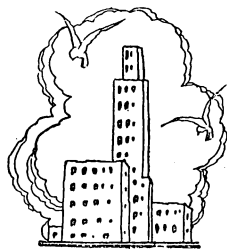
一、良心が最高の指導を得て、最終の完備に到達する。

生命の道德的理想。理想を以て、行爲の一切を率ひ之に順趣せしむる。此の理想と生命全體の道德的發達の趨趣より自個の長久且つ遠大なる生活の目的に調和せしめて之を得るなり。

又曰く、過去は目的たる能はず。現在は寸秒間一過せば目的たる能はず、道德の目

的は大なる理想。理想は常に我と共に進み、常に我の達せざる處に在り、然れども人の行爲益々進まば、終に最終限界に達せざるべからず。

此の限界の埒外が即ち理想と現實との合一するの境なり。而して、此の境に入れば人力も及ばず、故に倫理は理想を以て人の達せざる者と爲さざるを得ず。之に達し得べしとするは、宗教の範圍なり。感識世界以外の道理を以て記號的の公式と爲し、感識世界を補ふもの即ち宗教なり。



グリーンの道德説

意志。先に智識の主體として永久的の意識の再現にして自由原因を見たり。實踐の分にも自己以外の物と區別する感覺諸の感情と自己とを區別して、彼等を結合統一し關係の世界を作る。然るに智識の世界にありては、世界は已に事實にして意識は此世界を認識するにあり。世界の事物の存不存は吾人が隨意に定むる能はず。世界の事物は現實的なり。實際存在するものなり。之に反して實踐の世界に在りては觀念實現せざる間は其觀念たるに止まりて眞實の事實となる能はず。吾人の念頭にあるのみ。然るに此念頭にある觀念はよく吾人の力を規定し司配す。斯の如く觀念によりて規定せられ司配せらるゝ吾人の力が右の觀念を實現するによりて始めて觀念の事實となる。斯く觀念を實現せんとするを目的の觀念と云ふ。是を動機と云ふ。是動機は非自然的なり。單に動物有機體より來るもののみにては成立せざるなり。其故は先づ動機を作

るには自然的の必要これらの材料によりて動機は作らるゝなり。彼らの外に立て彼らと連絡統一する意識の作用によりて始めて動機となる。意識は自然的のものに非ず故に動機は非自然なり。是動機を作るは動機を有する人の意識が必要なり。

行爲者が其行爲に對して自ら責任を感じる以上は、其行爲の動機は某の形に現はれたる其人一個の善なり。そはたとへいかなる自然の欲望によりて動かされしにもせよ自己の意識によりて是原善なりとした以上は右の欲望は自然に非ず。其人の動機は其人の品性と其人を當時圍繞せる境遇によりて定めらる。()

此品性は其發達生長の歴史を通じていつも最久の善なりとしたる所を追求したれども服する處自己を以て終局目的となしたり。其故は品性は自然の結果にあらず。動物諸需要の結果にあらずして、意識其れ自身の産物即ち永久的意識の自己表現なり。

境遇に反動すといふは、品性は既に永久的の意識の産物にして而も境遇も自然の結果にあらず、品性と境遇とに定めらるゝ動機もまた決して自然の結果にあらず。

抑自我は思惟欲望感情を離れて別に獨立の存在にあらず。また自我を離れて思惟欲望感情が存するにあらず。時間を超えたる意識が諸の欲望、諸の衝動を自己に採用して品性を作り爲すなり。是自我なり。時間の外に立つ意識現在せざれば、諸の欲望衝動は支離滅裂して決して一の品性となること能はず。斯の如く自我は過去に於て、其の欲望衝動を寫象し、其を自己の善となし、自己に採用して遂に今日の自己の品性を作る故に、品性は或欲望に臨みて取捨をなす。過去の歴史は永久意識ありて始めて成り立つ故に自然の産物にあらず。斯の品性は望を當時の自己と同一視して實現せんとす。是動機なり。此動機より來る行爲は自ら自由ならざるを得ず。

斯の連絡によりて起る行爲を自由と云ふ。自由は不定にあらず。品性より出るを云ふ。道徳的行爲は一定の境遇に反動する品性の表現なり。品性とは人格のことなり。

斯の今日の品性は過去によりて制約せられ、又未來を制約するものなれども、其根本は自我に存す。自我は自家を改良する潛勢力を有す(未)に満足せずして一層良きに

到達せんとして、絶えず進歩せんとしつゝあるなり。斯の如き努力進歩改良ある故に道徳的生活の開展に發達あるなり。道徳に新生活を見るを得るなり。道徳の新生活の可能なるは歸する處、過去現在共に自己を現表する自我存在するによる。若し前後始終を一貫する意識なきならば過去現在未來の關係連絡を説明するなからん。

二、欲望——個體をなすものは自我の感情なり。人の個體をなすに此自我の感情に加ふるに、自覺的の意識感覺を寫象して之を結合し、知識を作す點より見れば悟性。欲望と自己とを同一視すれば欲望と稱すべし。自覺といふのも可なり。一方は欲望の根據又一方は悟性の根據、自覺的意識は悟性と欲望との共同根據なり。此自覺ありて始めて道徳的行爲と稱しう。始めて智的行爲と稱しう。善を願望すと云ふ。肉體衝動より來らざる或物を欲求すと云ふ。全體の幸福を欲求す。斯る欲望は欲望と云ふよりは寧ろ自我と云ふを適當とす。動物有機より來る需要なく、自我の統一を包含すればなり。斯る統一には智と欲と存せり。

三、欲と智の關係。衆生の非我的諸感覺感情を關係し、連貫以て一の關係の世界に統合せんと力むるは、自覺の意識なり。欲望を實現せんと力むるも矢張一の自覺意識なり。

先者は智後者は欲望二者同一自覺意識の二方、一は思惟一は實踐、二者根據は同一、二者互に相包含す。欲を離れたる思惟なく、思惟を離れたる欲なし。

四、欲と意志の關係。意志と欲望とは畢竟言語上の差のみ。

五、意志と智の關係。吾人の意は思惟と實踐の二存す。物の相互關係を發見して一世界に統合せんとするは智、念頭に浮びたるものを實現せんとするは意なり。

道 徳 的 理 想

道徳善の内容。道徳行爲の欲望を満足するもの、即ち道徳的力量的實現是なり。即ち現在實現せられつゝあるもの、實現の途にある完全なる實現を終局の眞個の善と爲

す。終局の眞個の善ありとの觀念は大いに吾人日常の行爲に其影響を及ぼし益々向上せしむ。

吾人智識及び行爲は皆等しく同一の自覺的意識の實現なり。其自我は動物有機體と云ふものとして、自己其れ自身を目的といふ特性を持って、自己を再現しつゝあるなり。

惡とは理想に達すべき正道順路ならぬ方に自己の満足を求むるものなり。

諸の智識文藝習慣制度等は最終目的の一部を現表する絶えず現表を繼續。潜在的を現實にす。自己の職務を衷心より愛する念より各自能力に應じて、人生の改良に貢献して、意志と習性の共同根底は自覺意識にあり。自覺主體が自己を満足せしめんとし努力、此習性は益々向上自覺心を喚起し、高等なる生活を創生するを助く。理性と意志とは動物有機を器官として自己を再現しつゝ、永久の原理の二を作す。

人の眞の發達は天與の力量の正當なる開展なり。畢竟發達せる意志と理性との合一する方面に向ふにあり。人の眞の發達は理性が是人にとりて最良の者なりと指示する所。

吾人が常によりて以て、自己の満足を求めんとする對象との合一。意志の對象が理性の指示する所に實現するに貢献するやうなもの、是希臘の道德哲學者が「理性に順應する生活」と。斯く理性は人の中なる内包的法的法則として人に其影響を及ぼし、意志を改良し理性に順應する生活を生起する方に向へば、是實に永久的睿智の眼に映する所。

道德理想の特性

個人と社會全體との關係。人の理想人の神的觀念は唯個々に人格に發現すとは、即ち社會によりてのみ達せられたるを主張することとなり。社會的我は個人格なし。個人格自己自身を目的となす主體なれば社會なし。社會は個人格相互に人格として認容す

る所なり。

社會が此人格の概念に内容を供給するなり。其内容とは人がよりて自己の満足を求むる自己の興味の諸對象を云ひ、道德理想の實現は個々人格に於て達せらるるといふも社會に達せらるゝと等しく眞理なり。社會が人格發達の條件なればなり。然れども個人格皆各獨特の天性と機會を有す。其故に彼らが人の理想の實現に貢献する所之善なり。されど各自皆自己の最良のものをなすと云ふ點に同等なり。各其能ふ限りをなすに至りて人類の社會は眞正の職分を充實し得。即ち神的觀念を實現し得。

道德理想の形式的特性即ち道德法。人が自己の合理的諸力量を實現せんとするは、神の中に既に實現せられ居る目的が、人を刺戟衝動して息まざる故に然るなり。その刺戟はいかなる形に現はるとならば、人が自己を意識すると同時に意識する自己の諸の力量の實現を絶對的價値の有するものとして想見するにあり。そは、(單になさんが爲に爲すべきもの)人の至善として絶對的に願はしきものとして、一切の他の欲望を顧慮なくして唯行爲すと云ふのみ。觀念衝動せらるゝ行爲に可能なりと。目的は力量の實現なり。此の方便は目的に達する力量を日々實現するもの、目的方便も力量の實現なり。人の善とは理想の實現に貢献する、即ちカントの無上の大法なり。

道德理想の本源

一、理想は共同善の源泉。動物の本原的同情と自覺意識を有する心意二の現在により、同情相助、我と人との幸福、社會要求の形にて顯はるゝ、道德の起原なり。

善の目的は人の力量を現實するにあり。(行)作用になし、(欲)所有に存するに非ず。目的の觀念に達する、カントの所謂天上天下獨尊善意に到達するにあり。何らの内容を有せざる法則に遵ふにあらず。社會及個人の特性を實現し完成するを以て、絶對的價値を有すとす。其完成の域は今見るに用なきも到達すべしと云ふ。内面の要求は絶えず人心を刺戟衝動し其方向に趨らしむ。個人の目的は、人其れ自身の完成に存

す。興味は主観的と同時に客個體。プラトニー、アリストテレスの二氏が行爲者の如何によりて眞徳と僞徳との區別を爲したのは、實に終局の斷定にして後世復改むべからざるものなり。彼等が道德の原理を建設してより、社會の進歩と共に目的の觀念は次第に充實せられ、確定せられ人の諸力量の實現は益々新なる形を以て、新なる要求を人の上に課し、益々包括的に擴張し來らざれば原理は古今を通じて一なり。愛國者の眞意は決して國民をして快樂を享受せしむる謂にあらず。國民悉く彼自身の如く善意を修養するを欲するやうになり、眞個の人力の發達進歩するに隨つて、彼愛國者を敬慕し彼に倣ひて己も亦自己の快樂を殺ぎて、社會の爲に盡すべく努力するならむ。道德の理想の優勝は最大幸福の謂に非ず、人類を完成するの事業につきては諸の興味及び諸の活動力が次第に其範圍を擴張するなり。

アリストテレスが道德の至極の状態は純粹なる沈思冥想にあり。

クラーニー終局至極の状態は、

一、抽象ならず個體のならず。社會的なる人の完成、其故に單純なる科學的（一）の一の實踐行爲に由つて到達し得べからず。

二、一切の人の自由に且つ意識的に與り、其目的に力を致しうべき社會的生活。

三、調和的の意志。各個人の意志にて而も一切の人の意志なる意志。即ち献身的即ち人の完成を以て其對象となすによりて、動かされ規定せらるゝ生活。

之に於て意志は抽象の法則に規定せらるゝ意志にはあらず。有益なる功徳ある社會的の諸活動の全體を包含したる、またこれらの諸活動を維持する力と、斯活動は他の目的に到達する方便にあらずして、其自身に目的たるもの、これらの包括意志を以て原理上道德の至極なる完全生活其自身と見るを正當とす。

道德哲學を行爲の指導に適用すること。予は常になすべき事をなしつゝあるか」この自問は正にこれ道德進歩の本源なり。

この自問は家族種族若しくは、國家の爲に能ふ限りの善を計らざるべからずといふ

個人の責任の念に外ならず。此標準に忠實なるに至る。この念によりて新なる道德を喚起す。理想の効用は、人生の改良に必須缺くべからざる件なり。

昭和三年五月廿八日印刷
同 三十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵税共)
年拾貳冊 貳圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人 小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番